

子宮がん検診

平成17年度より、子宮がん検診の対象年齢が「30歳以上」から「20歳以上」に引き下げられました。性交開始年齢の低年齢化に伴い、20歳代で子宮がんに罹る女性が増えています。若い人の「がん」は進行も早く、妊娠・出産を考慮して治療法も狭められます。「まだ子宮がん検診の年齢ではない」と考えている方に、ぜひ読んで頂きたいと思います。

子宮がん検診は一般的に、子宮頸部がん検診を指します。ちなみに、子宮内膜から発生する子宮体部がん検診は、不正出血など症状のある方の検査で、今後は健康保険で行うこととなります。

子宮がん検診は、胃がん検診と共にがん検診として早くから行われており、人々の認知度も高く、毎年多くの方が受診され、死亡率も低下しております。ただし、我国の子宮がん検診の受診率は20%前後で、80%台の欧米はもちろん、近隣のアジア諸国に比べても非常に低い事が特徴的です。

その理由として、日本人独特の羞恥心が関係していることが指摘されていますが、定期的な検診の必要性を認識して頂きたいと思えます。

子宮がん検診は、医師が肉眼で視認できる部位を簡単な器具で検査できるため、苦痛はほとんどありません。また長年の研究により、がん発生の過程がかなり解明され

20歳になったら子宮がん検診を!

子宮がんは、中高年だけの病気ではありません。「無症状」が、最も多い「がん」の最初の症状です。



「がんのできた」「検査のしかた」「結果説明」など詳しい情報は、下のホームページの【女性と健康 20代・子宮癌検診 詳細情報】で

ているので、少しでも怪しいと思われた時は何回でも検査することができ、健康保険の対象になります。悪化した場合でも「がん」になる前なら簡単な治療ですみます。現在、子宮がん検診は「がん」を発見するためではなく、「がん」になる一段階前の異形成の段階(遅くとも早期がんの、上皮内がんの段階)で発見し、「がん」の芽を摘み取る事に重点が置かれています。毎年、定期的に検診を受けていれば、突然「がん」を

告げられる事はまずありません。自分で擦って調べる自己採取法も普及しているようですが、この結果が正常と出て安心はできません。医師が見て「がん」になりやすい部位、怪しい部位を確実に擦過する必要があるからです。恥ずかしがらずに、産婦人科を受診してください。

健康教育委員会

岡 進岡産婦人科検台クリニック院長

千葉県医師会「健康ひろば千葉」
<http://www.chiba.med.or.jp/kenko/>
 携帯サイト <http://www.chiba.med.or.jp/kenko/i/>

